肇勢武者硯

一

元文二年刊　甘露寺編

序

筆ふ軒あるを武器とし弾ずる旨
六藝技中多分なる営由ぞんば
天下の治世乃道人其
名高かるべし主人を慕ふ年
今聖代に代れ探ぐる

上和泉乃武者絵以て勇
猛の誉れ所ハ又仁を以て
義士を称せ[illegible]一軸を筆ハ
海ふ書ハ[illegible]ハ[illegible]書法乃
画工住眼春ト雨特の新年
門人何某是ハ絵写世間也

圖の傳り其謂を書加へ梓ふ
らもを免為画工乃仮[illegible]
邦都を慨ル人世間ハ賞歎
し寫なる筆勢武者絵乃法
ふをうゝ[illegible]月乃ごとく[illegible]
しく書畫乃導ふをなる辞を

松ものうち武小武者硯

して五冊目和漢世代之書

之二冊

浪花 貫森出

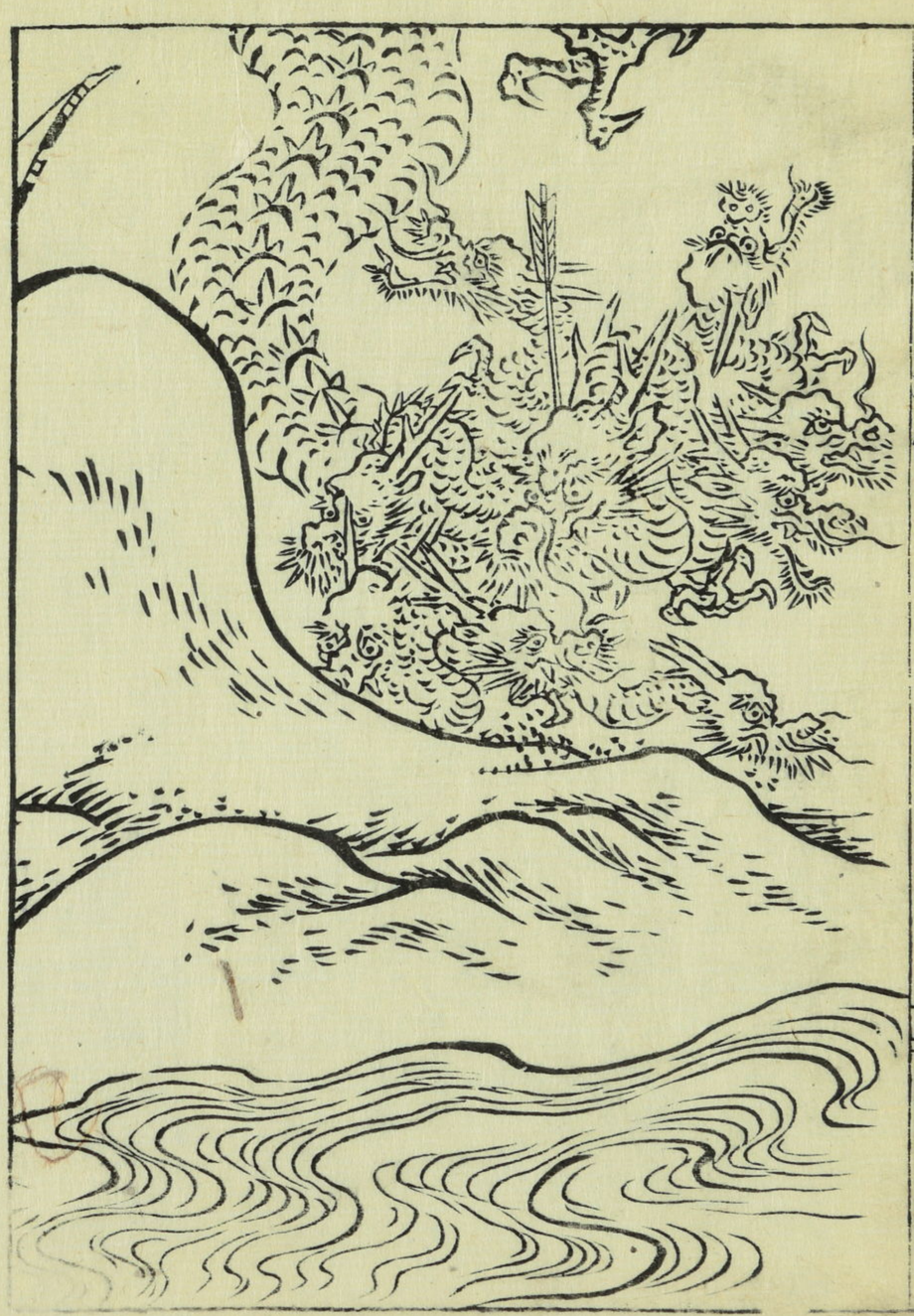
筆勢武者硯巻之一

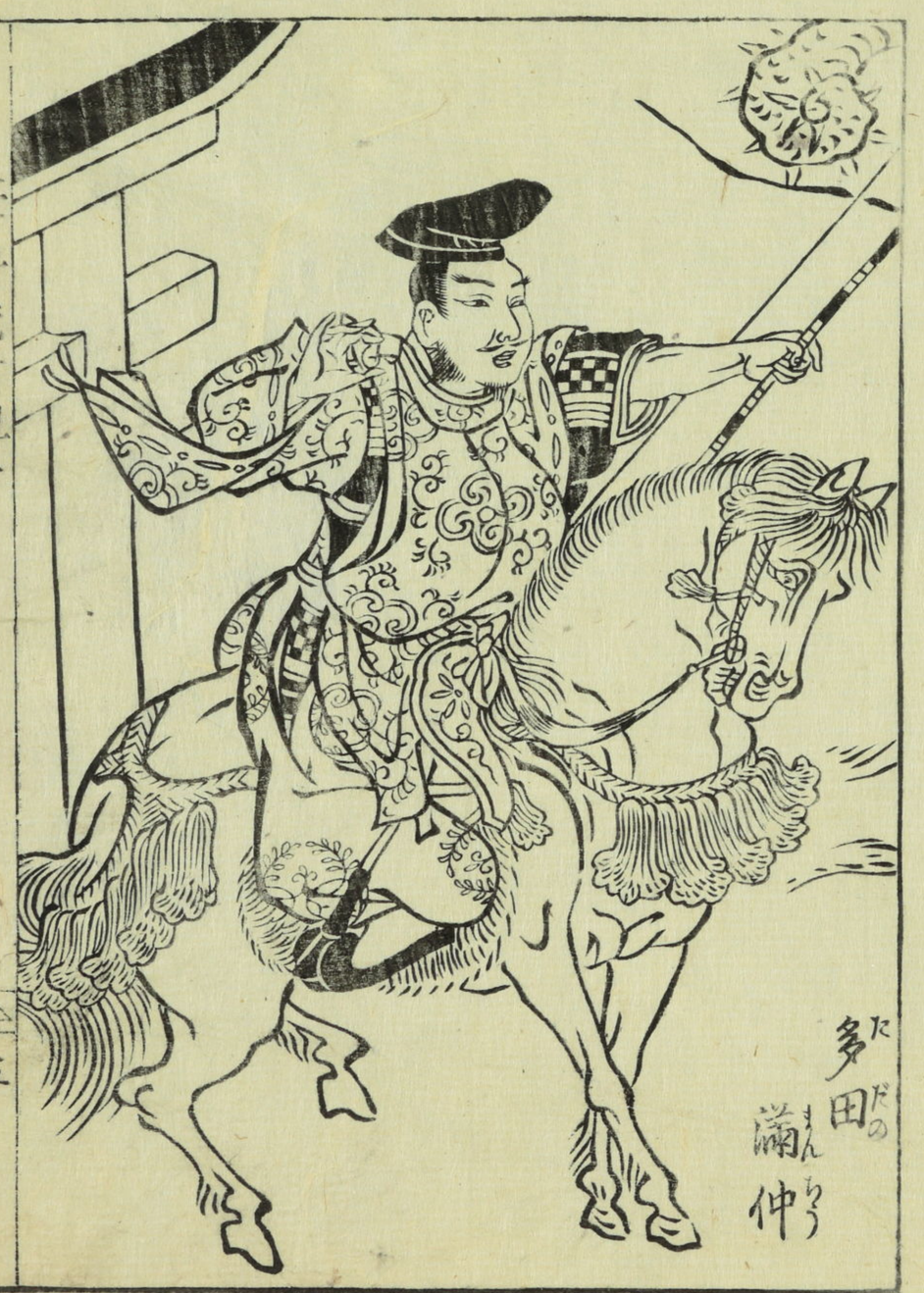
一 祇園火燃
一 九頭の社乃渭
一 源頼光力様松
一 源三位頼政鵺退治
一 渡島綱鬼丸脇切
一 坂田金時雅
一 頼光酒天童子退治
一 安藝守熊野詣
一 清盛入道白拍子接
一 獅子谷會合
一 山門衆徒みな

祇園の火ごぼし

都祇園のうらうふ白河院小仕へ給ふ女御ゆまれ川祇園女御と
いう院仕給ふ御幸なりしかれよ月ねうきをとりてはらく洛
いぶせくわびしけるふ所よりねの針をとでしうぶく背高きう
人をうとの出うう美変化うんあまこで先ちと宮旨あり給れ
ハ忠盛参りうりとしもどしとむくまれてねどろく紙灯をてんどうれ
六十くうりなるふかうしー神前のみあうー参りとのうりかうふ
ぶるうしハ面白ぬせじんあ麦ふうをとりてかげきううをぬあ
ぶりる忠盛やそひしー半紙御感れあまりはうしあうの女ハ
をたゆふかされうりれて月をうりはるよ誕生ゆまれ生れ乃
後平ぬ清盛とゆハ美うり城ハ白河院の御胤ありし少武威
ゆをくさうんありし事いをしうふうをうんつよれ

平忠盛




多田の滿仲

源頼光

九頭乃社の謂

左馬権頭浦仲弓馬武勇歌道ハ達人にて常ゝ住吉乃神ハ歌
しるべ給ふ或時我居住をぢきに不いうるに土地ハ住しんを神
ゝ夜ハうせんと七日系義ありり満系乃夜あらうに塩竈ハ
浮て示現ふまうを白河の上矢一をぶ方ゝ馬ゝ乃ゝ
神系ゝ白い心中ハ系ゝ小ゝ白い故ら結ゝ矢ハ虚空
ハ義ゝり津の玉多田の庄ゝり大きなる池ゝ九沢ハ大蛇
住て人民を害をすゝ水 十方ハ多ゝ色ゝ川ゝ井地ゝ
頭ゝ世ゝ矢あゝて矢ゝを射ゝ流方ゝ
て山田乃助とゝる故ゝ多田ハ庄と名付ハ井ゝ乃ゝ嫁塚
をかまへゝ長ゝ一社をはゝ九沢大明神と号ゝ
大蛇をも祭り給ゝ

源頼光力様

多田満仲ハ摂津守源頼光ハ唐土養由基ゞ娘林花女ゝ
雷同乃弓を賣中ハ極り給ふ程ゝ名乃ハ天下を絶ゝ 文武
両乃ハ乃方ゝを賣中ハ極り給ふ程ゝ名乃ハ天下を絶ゝ 文武
頼親の悪逆奏ゝ長ゝ剣 祝祖ゝ名ハ八幡ハ乃ゝ
ゝ宮中ハ行ゝ思ゝ行ふハ我ゝ清和乃流をいゝ
将軍ハ職をあゝ行ゝ世ゝ禁裏守護の方をゝ行ゝ病
ふハゝれ今ゝも合戦ゝ鬼ゝ
ゝ力ゝ乃ゝ
二ゝひゝまゝりのゝ
ゆゝ行ゝ
上ゝ今ゝ力ゝ

源三位頼政

渡辺の綱

源三位頼政鵺退治

人皇七十六代の帝近衛院御悩ましてよるくるびへ給ひ社の
神宮法山の老僧大法秘法修し給へども更ふ給なきよして御修験
有て異化生の形あらはれ出ぬ無庫寺頼政弦打鳴し矢を射給ふ
せしに宮名ある射政いうとあるべきも君命なれば力なき事なり
勢ある弟ふハ強弓を一人也其名ふ人の特多ふ重茂の弓山鳥の尾を
刻ぶる矢をおとやくしと待ふ東三條殿森の方ふ黒雲あり御殿のふ
かふふと山悩もるもるもう頼政心中よ八幡宮よ祈誓し雲中ふ向いてうろ
矢ほどうしうう廣きハやそ猪早をうろくあるふにいまつてぶ
しうんを化生の長中射あらきてうり其形化猿尾蛇足虎爪
長形のとのうとれるを御悩平金内しく御威の上昇敵をゆるされ
もるとしふ名剱ふあるれ弟とうろ宮女をとられ書とうるるを

渡邊綱鬼の腕切

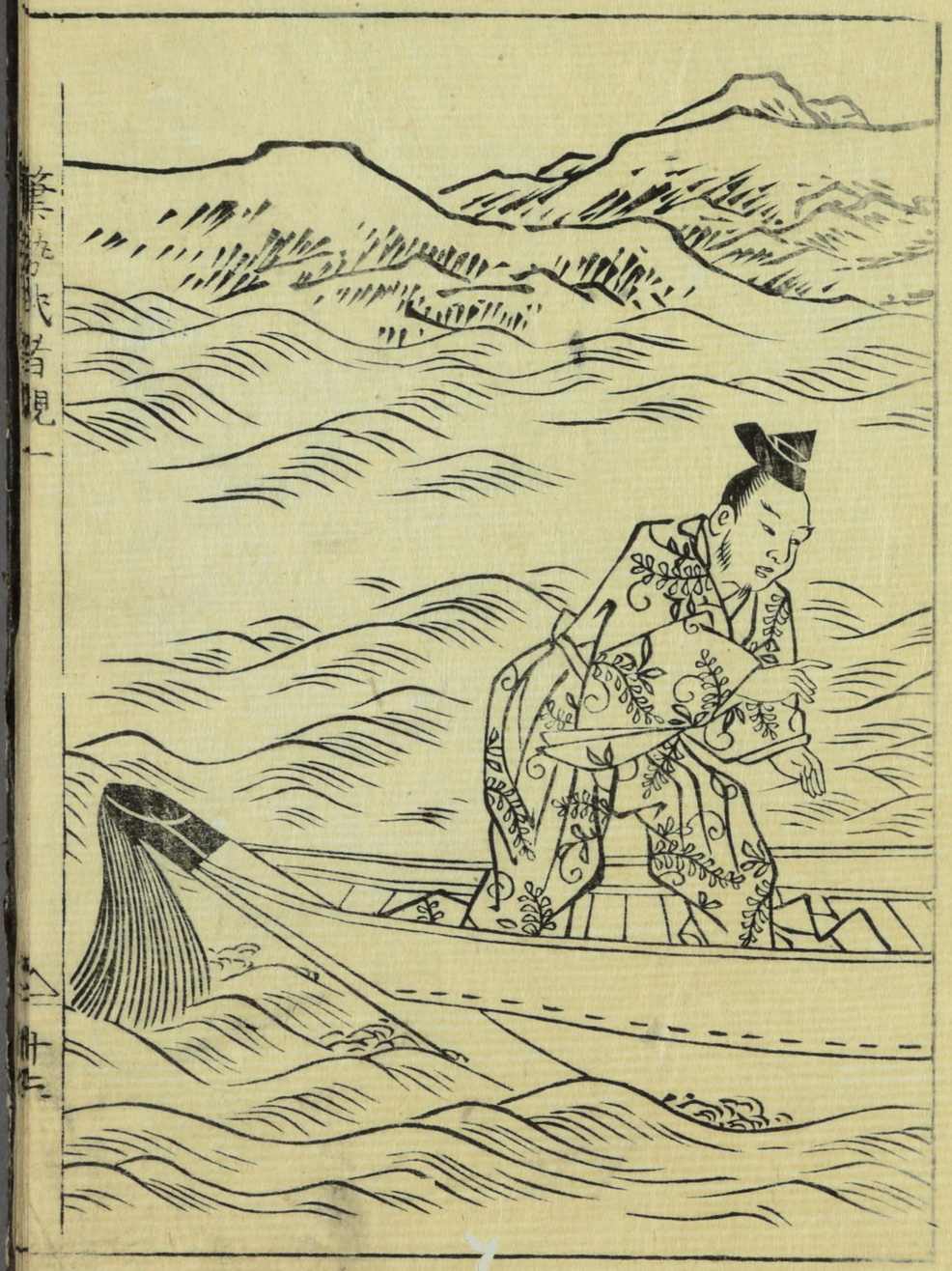
帝都一條大宮ふ羅生門ふ鬼ふ住ふ髭切丸をとられ悩ひるる一條堀河辺を物をなりけるふ二十ばかり
なる女房をとゞ優るるうつくしふ来あるとれ老ふ行とたりぬるを
てうまでいづくまでを送り来るとの老ふ北女りふやうはとハあるこ山れ老ふと
いひしを忽鬼神となるく深るとるとてはんで虚空ふ行き消綱髭切を抜て
鬼の腕を切しを落ふ小舟れ出廊の屋根ふ落る形光へかくせ
ふ上ふ時希有ふ決ふて切ふ儀の晴明をめしてはせ給ふ給ふ一七日れ
齋して屋敷をかゝるべし祈禱ハ仁王経を讀誦せらるべしとれ
ける程ふ不ふ鬼神深ふ書毋と化して渡ふ屋しれり帯相続て
鬼の腕をとる是則我腕ふるとて破風ふ投けるとり飛るる丈
より渡辺ふれ家ふる彼風をはるとるとり

坂田金時稚立

信州あけろの山より山姥といへるものありくとれふ一ぞなを
なげきて岐阜丸といふり此ものは生まれ力にて大きく越
いのちとうんで牛をもせばし朝者山中にて樹木をたをし
岩をおろし只力をたのみとして世をあなど
粉光四方に輝いりうり山とのぶらんし伊香りを
さまし我ふはくはげしかりあれば山姥より名をたびく
形をあらわせまいりと成長して坂田の金時となのり
武勇たくましく数度乃いくさに名をあらはして源家
より他ふゆらるるまりどし給ありてや
そなたを伴まじうふ
さて

坂田金時

酒呑童子



平清盛

雜談雜話雜部 一

新元酒呑童子退治

新元酒呑童子退治丹後国千丈が嶽に就きなる人
山伏のとくさふ者立出同行の所に酒宴さけをふるひ乱れ童子寢所にいたりて其席を辭倒也
ぬーうりひとり人ハ一ふふ入く体くこなるこいかこ世さ所ろて
そのぐ志人附刻ことあまてと寢室のものく水ひろ元なるひそれ
はものの一間をかくやうそかのかをと害し新元ハ者ふ之指を
よくのの所多仏ぞや酒呑卒古れ四よあつて生命をとむさ志人
をなるやまとこ罷ぬ深せんあ世ふくひふくりそ心えを二
刀さんきるくねくさんとを試ハ天王を見とれこへそこ
くに其像ふ首をくね結へハ首も神を生るごとく眠と見
出ーー穴くる新元ハ塊くうくなりりくり

平安義守継野詰

平安義守継野詰
平安義守清盛ハ忠盛乃嫡男にて保元年治ハ乱に為義
義朝をたいけ平家繁昌をとくくり継野詰
門加護なりを継野系詰あり嫡別あの津より和と
ふて後河乃時大きるる強ハ和中くに志ふやうて来
よをふ安義ちかを波ふふふふ周の武王
系結ひーー和ふ白魚ひび入く吉事ある今我
系ふる系ふ大英ひびいも事ふ罪進を合考
前表をくて記序ふ祝味ひきーりそれより修く
吉事お憑く一門繁栄し其分大政大臣官爵
ありて系統天下りかくやそれり

白居易
柏子

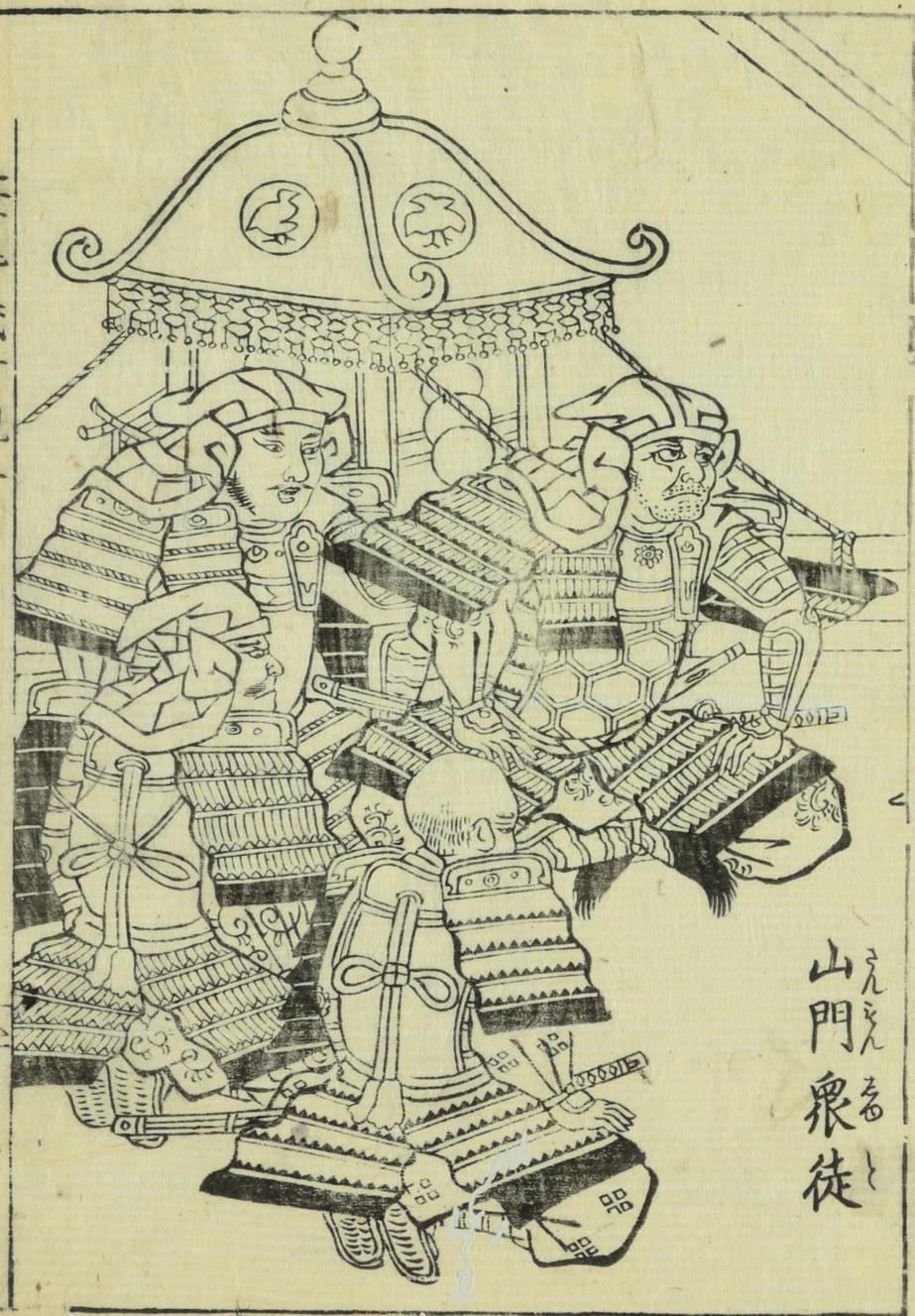
獅子谷
會合

平相国浄海白拍子挑逸

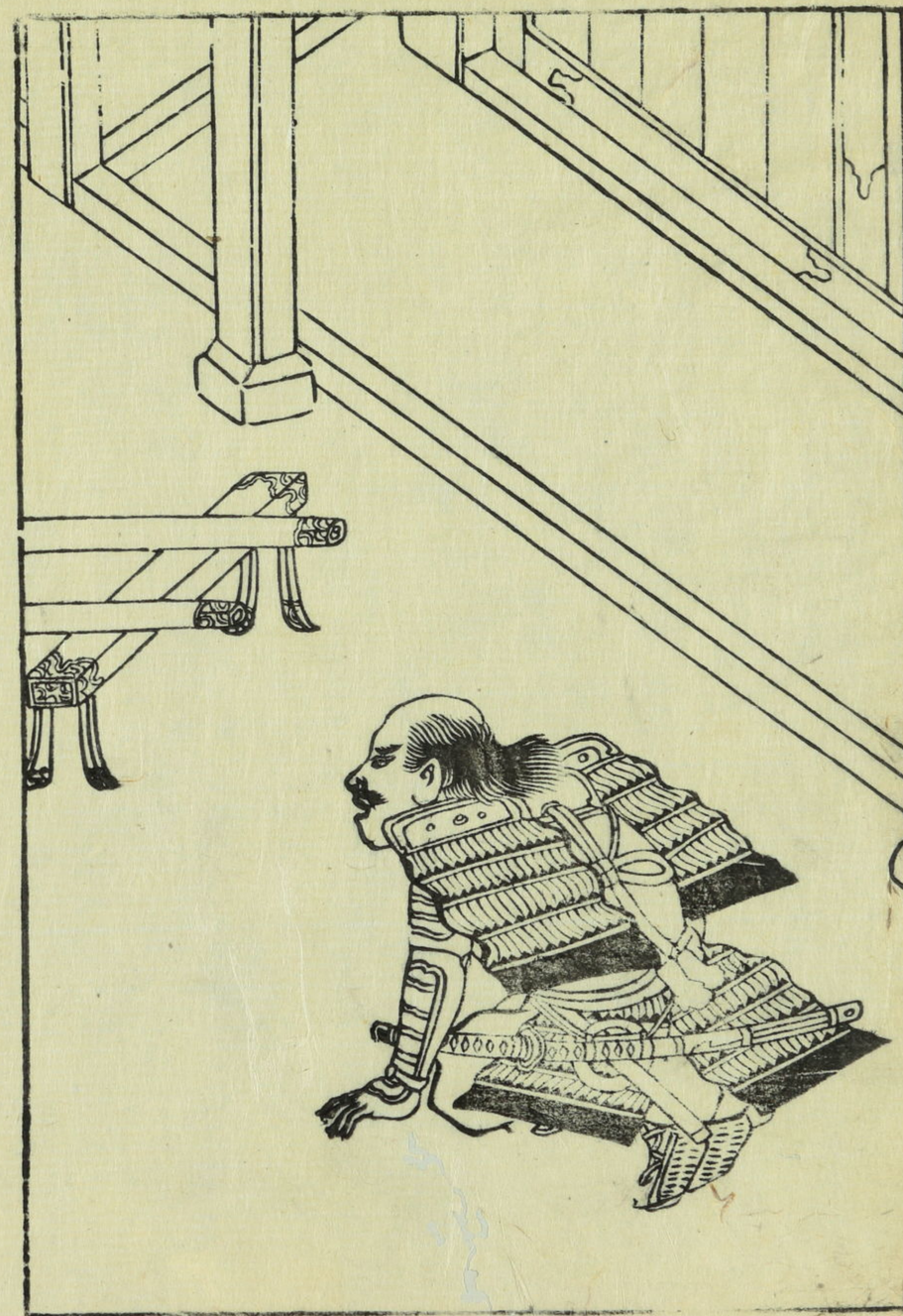
平相国清盛入道して浄海と成給ひ威勢天下をあまさずしたがへけるが
いづれもたぐひなくさせ給ふ世の中に繁栄あまり相国西八条に
妓王妓女とて二人の白拍子を寵愛し朝夕夜遊戯し給ふを宴楽
去けるハいづれ出の白拍子仏とよぶ者いまだ十六才にて舞
上手なりしかバ去ある人相国に御見をねがひて参入なりしかバこ
のたびハよびよせ給ひしが妓王情ありて此事をとりなし
かしこまりて一さし舞けるに相国舞も上手なるよし
それハ浄海此からに心うつり給ふに妓王妓女をいだし
けれバ二女ハせんかたなく嵯峨の里に引籠りかくれ住
のちには仏も世をはかなみて西八条をしのび出て嵯峨の
小庵に至り同じく髪をおろしてもろともに後世の道に入りしとかや

獅子谷会合

平家日を追て繁昌しけるにつけて驕奢つのりてそれを法皇
をないがしろにおこなふを遠恨ありけるに本より新大納言
成親卿俊寛僧都西光法師をはじめとして多田蔵人
行綱なりしが平家をほろぼさんの謀をなし鹿谷の
山荘にしばしばあつまりて平家をうたんとはかりけれバ法皇
もまた御幸ありて平家討滅の事をはかり給ひしに多くあり
しかども俊寛西光ハ首としてはげしかりしが
ことに平家の首をとりてまつりごとをかへさんといひしが
行綱ハその後に与力しける平家をうらぎり返りて
ぞそむきしとかや



山門衆徒



みな〻物ゝ此事

山門乃京洛ハ日吉祭禮の古例にて八王子社乃神輿を
かぐら一条さがり松ノ下の西くゝりくゝり
さげ堂ゝこの門ゆくゝゝ結山法のより西さハ小の門をゝゝめ
ゝり此門ゝりみゝをいまゝとのくゝりけるはゝりゆきたゝれ
中ふいひれゝりゝゝ我ゝゝゝゝゝ小路ゝり此門ゝり入結ひ
ゝバ京洛ゝひゝゝゝゝ京ゝゝゝゝ知りん祭門ゝふれ
どのゝりもゝりゝゝ結てゝゝゝゝゝ京洛ゝゝゝゝゝひゝゝ
待賢門ゝり入ゝれバをハ粉藉ものどゝゝ内ゝり矢ゝゝ
ちゝ弟ゝけふゝり出ゝれゝゝゝゝゝゝ神輿ゝ
てゝゝくのゝゝゝてゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ